

ディバ砦の発掘 2020

—シャルジャ首長国、UAE—

佐々木達夫 金沢大学名誉教授

Excavation of Dibba Al Hisn Fort 2020: Sharjah, UAE

SASAKI, Tatsuo Professor Emeritus, Kanazawa University

1. ディバ砦

アラブ首長国連邦シャルジャ首長国にあるディバはオマーン湾岸のムサンダム半島付根に位置する、アラビア半島の典型的な農漁村の一つであった。現在のディバはオマーン領、シャルジャ首長国、フジェイラ首長国の3地域に分かれる。新石器時代の石鏃や青銅器時代の石製容器、青銅器、土器などが発見され、鉄器時代以降から20世紀中頃まで類似した生活が営まれた。青銅器時代にワジ内の灌漑が始まり、鉄器時代以降は居住する家構造が定型化して、生活様式も20世紀中頃まで漁業、農業、牧畜が主な生業であった。

2. 発掘経過

2020年1月15日にディバ砦発掘調査を開始した。同時に砦の等高線図作成、ドローン写真撮影を行った。

マウンド東側の平坦地に東西・南北方向の長いトレンチ1、2、3を設置した。4月からは砦マウンド周囲に3本のトレンチを設定した。7月から砦マウンド壁を主に調査するトレンチを4本設定した。12月末まで、発掘を継続した。

以上の発掘は、表土層、第1層、第2層と名付けた層の調査で、その下の第3層と呼ぶ灰色砂層は数カ所の壁下部を除いて未発掘である。

3. 層位

表土層は1990年代のマウンド擁壁保護壁建設以後とする。1990年代の一部も含む層を第1層とする。表土と第1層は掘り込まれた部分が多く、多くのコンクリート基礎が残る。その下に層位的に堆積する数枚の灰色や黒灰色の土層を第2層とする。第2層は小さな炭片や灰を含む黒ずむ土砂が主となる生活層で、



図1 ディバ砦、東側海岸から撮影

18/19～20世紀の陶磁器片が多く出土している。

第2層には建物基礎跡、マドバッサ、タンヌール、炉、浅い穴が残る。砦平坦部南側外の建物では小さめの丸石を両側に並べた石壁基礎が発掘された。第2層内上部の建物は20世紀中頃から後半にあったスークの北側部分と推定される。下部にある建物は居住用家屋であろう。

第3層と名付けた灰色砂が第2層の下に堆積している。混じりが少ない均一な細砂である。第3層は上層の第3a層と下層の第3b層に分けられ、第3a層は厚さ10cmほどの薄い堆積である。ほぼ同じ海拔の平坦面が広がる。砦マウンド石擁壁基礎は第3a層砂面上に築かれる。砦内平坦地内東北部の建物部壁も第3a層面上に築かれる。第3層は発掘区域の各所で発見される基本層の一つである。

4. 砦マウンドの造成

現状の砦マウンドは平面が歪んだ方形であった。砦を築く場合、周囲より高い部分を選ぶことが通常であるが、当地は平坦な砂浜に砦が築かれている。ディバ砦は海拔3.5mほどの平坦な砂浜海岸の一部分に土砂を6.5mほどの高さに積み上げ、海拔10mの平坦面上に建物を建てた。

砦マウンド石擁壁位置を確認するトレンチにより、擁壁はしばしば補修されたことが明らかである。

south 21.4 m では、1990年代の壁の内側に三つの異なる時代の壁が発見され、計4基の壁があった。新たに確認された2番目壁は警察署敷地境のコンクリートブロック壁である。3番目壁はその内側の壁を補強するための丸石積み壁である。4番目壁は砦石擁壁である。south 10.8 m では1990年代壁の内側に一つの石壁が発見された。それは丸石積みの南壁塔である。west 10 m、20 m では、1990年代壁の内側に1本の壁が、north 15 m では1990年代壁の内側に数本の壁が残っていた。east 10 m、20 m では現在残るコンクリート境壁よりも東側となる平坦地に幅1 m、1.4 m、1.6 m の石壁が底部のみ残っていた。石壁の東側平坦面には石壁に接する3段の石段も見られる。マウンド上に登る階段のようである。警察署建物建設に際して砦マウンド東側の上部は掘削されたように見える。

砦マウンドは土砂を盛り上げて築き、その外側面を丸石で覆う構造である。丸石壁は土表面に石を貼り付けるが、マウンドを固定する壁として十分ではなく、何度か壁崩れを起こしている。石壁が外に膨らんだ部分、上部では倒れ掛かって斜めになった部分もある。

マウンド上面に石壁と泥レンガ壁の痕跡が見える。石壁建築と砦建築当初の西側壁である可能性がある。砦マウンドと壁塔は第3a層面上に築かれている。第3層は灰色砂層で調査地域全体に広がる自然堆積層で炉などの人々が居住した痕跡が残る。北側隣接地域の



図2 ディバ砦、北側は2020年2月発掘終了地点

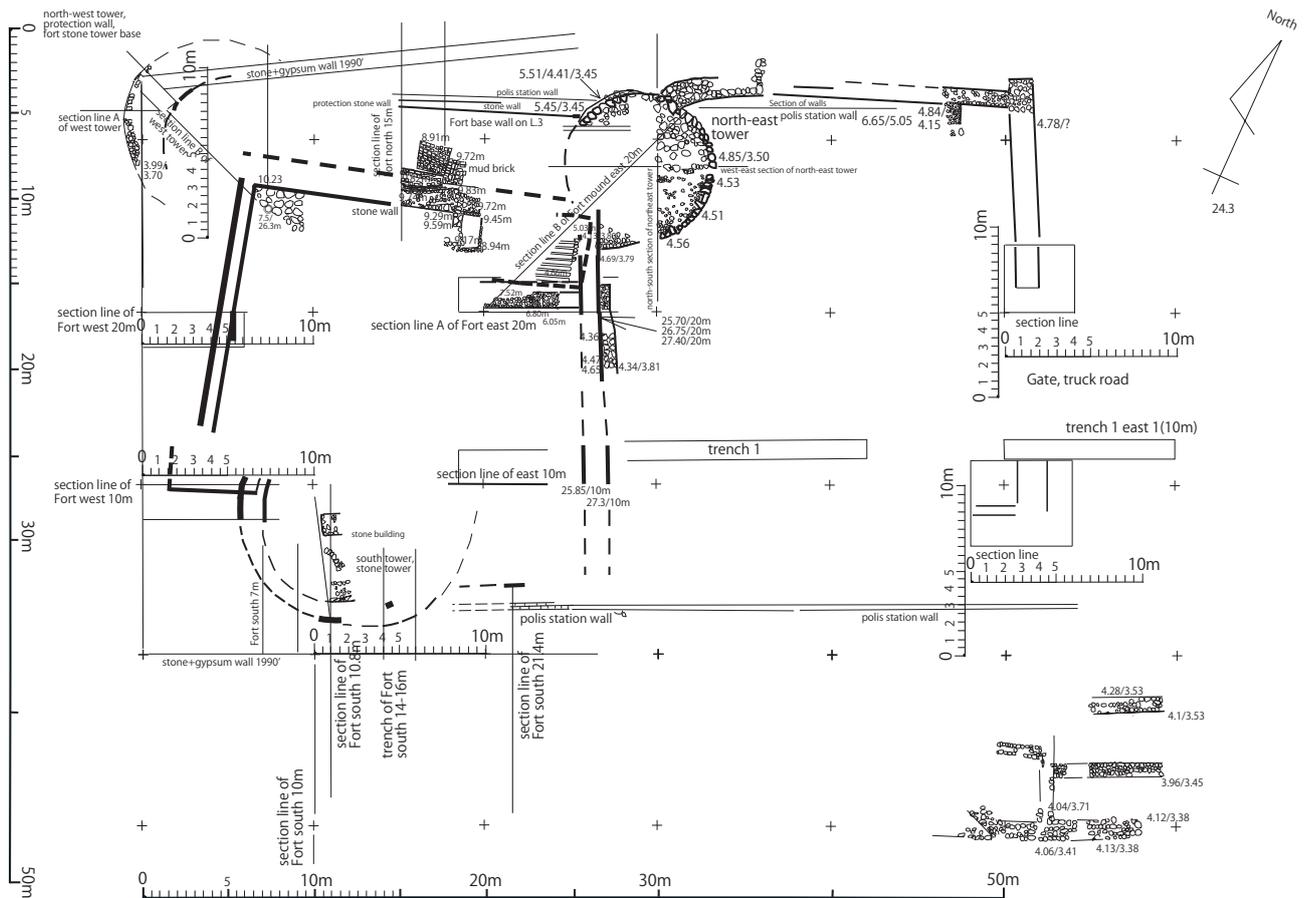


図3 ディヤバ砦第3層面の建築物



図4 トレンチ south 14 m の発掘風景

発掘でも同じ砂層の第3層が発見され、その表面は海拔3.3~3.4mほどである。砦マウンド壁塔基礎と建物壁基礎の建つ面は第3層であり、海拔3.4~3.5mほどである。北側発掘地点では第3層面から1.2m掘ると水が湧いた。居住可能な堆積層は海拔2.3mで、砦マウンド下の堆積層は1.2mである。

5. 砦マウンド周壁付帯の壁塔

砦マウンド擁壁に付帯する壁塔は、平面形が円形・半円形で3か所、北西角、北東角、南中央にあった。マウンド壁は何度も補修されたと思われるが、1990年代の遺産局による保護壁造設が最大の工事であった。

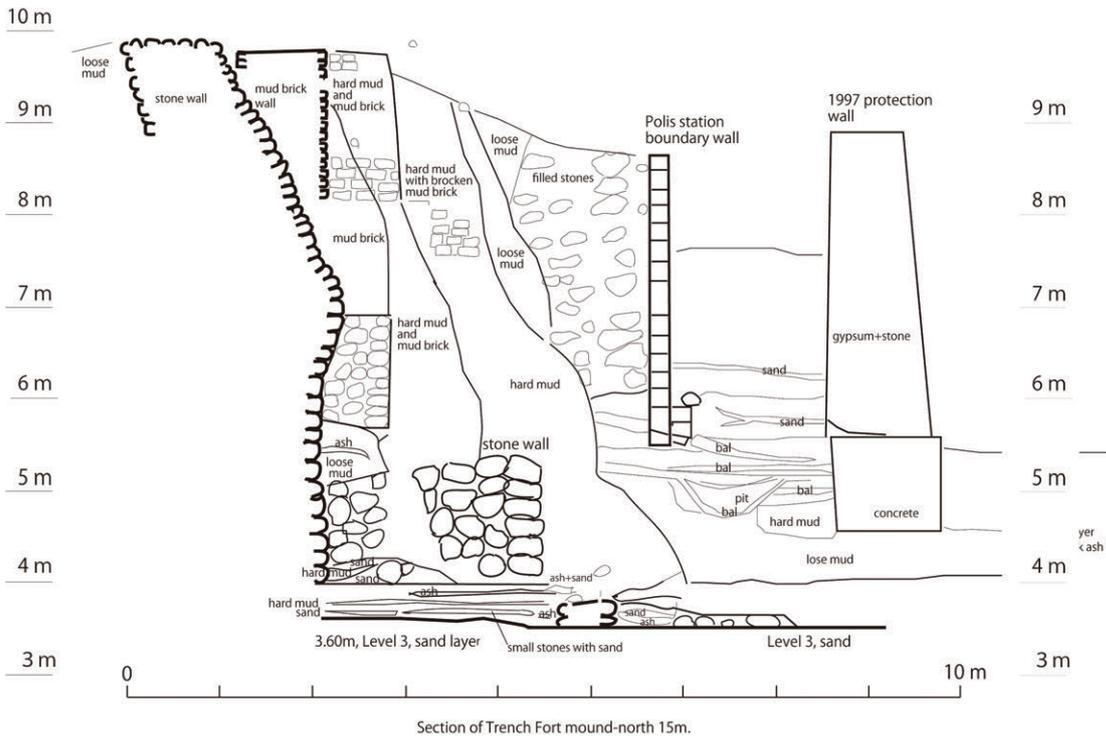


図5 north 15m セクション図

その際、擁壁に付帯する塔も新築された。新築北西塔は北西壁塔の基礎の上に築かれたようで、現在、その地点にトレンチを設定して調査中である。新築北東塔は北東壁塔の北西外に位置をずらして新築された。新築東南塔は、南中央部にあった壁塔をマウンド東南側の角に位置をずらして復元新築している。

北東壁塔は第3aの砂層上に石積み壁で建てられ、基礎から1.5mの高さまで残る。基礎部は内部まで石積みで造られ、円形壁塔の直径は9m弱で大きい。南中央壁塔は半円形の石積みで、壁塔内部は空洞となり、基礎部は第3a層上に建っている。

6. 砦周壁

砦はマウンド部と東側の平坦部の二つで構成され、平坦部は北側、東側、南側を周壁で囲まれる。西側にはマウンドがある。東側壁は丸石積み壁で、中央部に石積みが切れる部分があり、門があったようである。東側壁は1.4mの厚さの丸石積み壁であり、砦門は海に面する東側壁の中央にあったと思われるが、未確認である。南側壁の位置は現時点では未確認である。

砦周壁の北側壁は数回の補修があり、警察署建物時代の壁は砦周壁の内側に沿って造られている。

7. 砦マウンド上の建物群

砦マウンド上面には2020年の調査時点で二つの建

物が建つ。南側の直方体塔と北側の平屋建物である。直方体塔はセメントブロックを積み上げ、1937年建造と言われる。平屋建物は1960年代建造と言われる。南西部に水溜がある。これらは砦建造時の古い建造物ではない。マウンド地表面下には石積み壁や泥レンガ積み壁の建物が数棟残ることが確認されている。

8. 砦外南側平坦面の建物群

建物跡は第1層、第2層及び第3層上面で発見された。上層のコンクリート基礎とコンクリートブロック使用の建物は警察署時代と並行する時代である。第2層内の建物基礎の大部分はスークの建物であろう。建物内ではマドバッサ、タンヌール、炉が発見され、建物跡外側では炉が発見された。第2層と第3層上面には大小の丸石と泥を使用した石積み壁基礎が残る。発掘は第3層上面で止めている。

砦の南側平坦面には1950~60年代にスークがあったと言われる。1970年代末頃の写真に平屋建て建物群が海岸に直行する東西方向道路の両側に見え、それはスークである。1980年代にスークは現在の位置(以前発掘した海岸遺跡地点の裏側・内陸側)に移動した。第3層上面に基礎を築いた建物は砦建設あるいは砦と同時に存在した同時期の建物であろう。

9. 出土品

第1層、第2層から陶磁器片が多数出土している。クッキングポット、壺、瓶、鉢などの土器が多い。現地産とイラン産が主である。数量は少ないがヨーロッパ産、中国産、日本産の盤皿や碗も出土している。これらの陶磁器から第1層と第2層の主要な年代は19～20世紀であり、18世紀の陶磁器も含まれる。出土品の種類と組み合わせは北側の居住区発掘出土品とほぼ同じである。

出土品には数少ないがより古い時代の破片も含まれ、中国14世紀竜泉窯青磁連弁文碗、14～15世紀竜泉窯青磁盤、イラン15～16世紀の白濁釉陶器碗及び緑釉陶器碗盤、オマーン産褐釉陶器、イラン産石英素地陶器がある。古い時代の陶磁器は第2層内から出土しているが、より下層の物が混入したのであろう。それらはコールファッカン町跡の15世紀から16世紀初めの

出土品と同じ組み合わせである。第3a層からは青磁、緑釉陶器が出土し、第3層の年代は砦北側で発掘した居住区第3層と同じ年代であると推定される。居住区第3層石敷き面から出土した景德鎮窯青花皿(カラックウェア)は、砦の発掘では未発見である。17世紀陶磁器が出土しないことから、第2層と第3a層の間には、17世紀に無居住期間が存在したと推定される。

3点の球状鉄製砲弾が出土した。いずれも著しく錆びている。砲弾1は北東壁塔の削平された上面の第1層の出土品である。直径8.5cm、重さ2.2kg(残存1.9kg+推定欠損部0.3kg)。砲弾2は砦マウンド上面の塔南東基礎部付近の表面近くで採集された。直径10.9cm、重さ4.4kg(残存4.3kg+推定欠損部0.1kg)である。砲弾3は東北壁塔の表面、トレンチ6、第1層から出土した。直径9.0cm、重さ $1.9+0.15=2.05$ kgである。

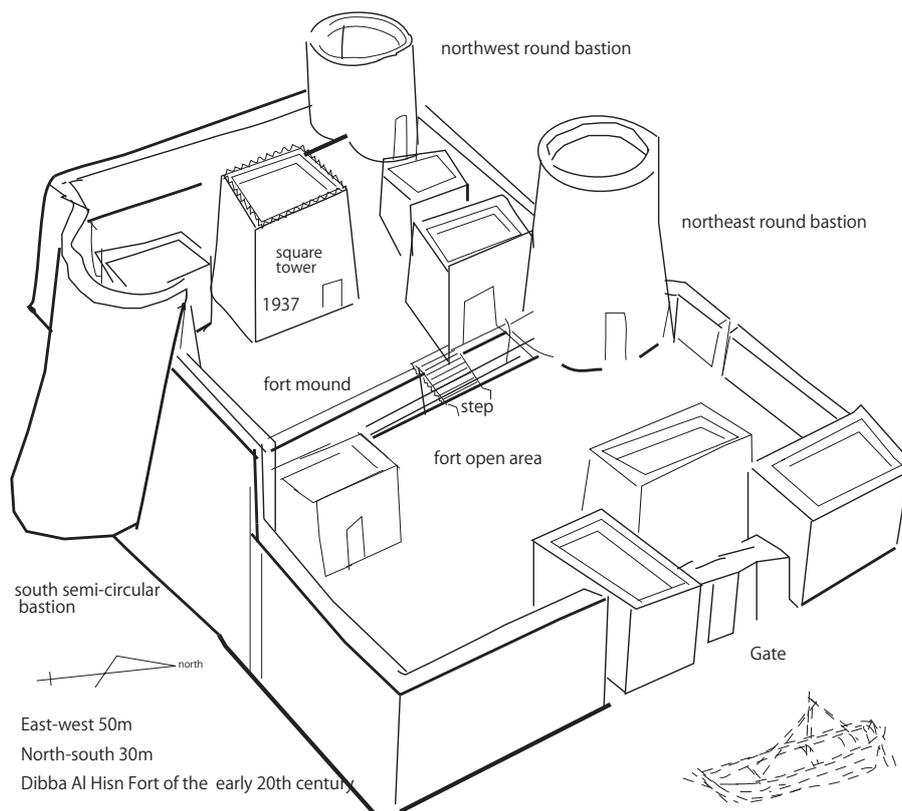


図6 砦復元図

10. 砦の建設年代

ディバ・アル・ヒッサン砦はディバ海岸に残る地方町の小型防御施設である。東南から東北方向に流れるワジが幅7kmほどに広がって海に流れ込む中央部に位置する。砦付近を囲むように入江が入り込み、砦から西北方向の内陸部に港があったと伝わる。その位置は砦から徒歩数分以内の近い距離である。ワジ内は居住地に変わりつつあるが、今もまだ広い農園がワジ内の内陸側に広がる。

ディバ・アル・ヒッサン砦は変形した方形マウンドと方形平場の組み合わせで構成される。方形マウンドには外側の擁壁に接して半円形壁塔が造られ、マウンド上に方形建物(塔)が建てられ、方形平場にも建物が建てられた。マウンドの現在高は標高6.5m、海拔10mである。マウンドの基礎はトレンチで一部を確

認したに過ぎないが、海拔3.5mの第3a層砂層上に築かれている。マウンド造成時のマウンド外側壁の基礎が第3a層砂層上にあれば、建設は第3層堆積後に行われ、第3層の年代が重要となる。第3層の砂層は、北側に隣接する居住地区発掘地点の第3層砂層と類似している。両地域の第3層上面はほぼ同じ海拔3.5mである。第3層上面から1.2mほど掘り下げると、発掘した居住区と同様に水が湧く可能性が大きい。

居住地区第3層は16~17世紀層と推定され、その直上の第2d2層は17世紀後半か18世紀である。第3層の堆積が終わってから、人々の居住しない数十年から百年ほどの期間があつて、第2層の最下層である第2d2層に人々が住み始めたと推定している。現在は砦の推定建設年代を18世紀前後としているが、今後の発掘結果によって、建設年代が17世紀に遡る可能性がある。